Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

世界中の人々が笑顔でお互いに尊重し合える社会に

日蓮宗安詳寺住職
小島知広さん

第55回

こじま・ちこう　1962年生まれ、東京都出身。立正大学卒業後インドへ渡り、1週間の断食行、1か月かけて600kmの平和行進などを行う。2006年よりラオス、カンボジアの学校建設に携わり、アジアの貧困諸国で自立支援を行う「四方僧伽」に参加。2011～2014年、代表として活動。2012年からは「ミャンマー/ビルマご遺骨帰國運動」の共同代表。

私は大学卒業後にインドで断食行と平和行進を、湾岸戦争時の1990年にはヨルダンからイスラエルまでの平和行進を行いました。その後もラオスやカンボジアの学校建設に携わるなど、海外で積極的に活動してきました。

そんな中で出会ったのが、アジア諸国で貧困からの脱却を目指し、自立支援を行っている「四方僧伽（しほうさんが）」の活動。国や宗派を越えて仏教徒が集まり、さまざまな形での支援を行っています。

たとえば「仏陀バンク」という活動では、各国の希望者に無利子でお金を貸します。事業を始めるなどしてお金が稼げるようになれば返済してもらい、そのお金は新たな希望者への融資にまわす、というシステムです。「米（こめ）銀行」は、田植えのための種籾がない人のために元米を貸し付け、収穫後に元米＋20％のお米を銀行に返す仕組み。こうしてお金もお米も巡り巡るのです。

上／東京都大田区の閑静な住宅街にある安詳寺の本堂。右／毎週木曜日、コーヒーやスイーツが楽しめる「カフェテラス安詳寺」を営業。下／今年2月、ミャンマーで、少数民族の村で発掘された日本人戦没者のご遺骨供養を行った。

日本人戦没者の1日でも早いご帰国のために

また、私は2012年より「ミャンマー／ビルマご遺骨帰國運動」の共同代表も務めています。戦後70年を迎える現在でも、海外での日本人戦没者のご遺骨の多くはまだ帰国を果たせていません。特に、少数民族支配地域の多いミャンマーでは、約4万5000柱が未帰還といわれています。そのような地域でのご遺骨の状況、実態を現地調査するのが私たちの活動。仏教の僧侶が中心になっていますが、宗教や宗派を越えて賛同者が集まり、運動を広げています。

少数民族の村では「日本兵の遺骨が出ている」という話を聞きました。戦後もビルマに残った元日本兵の方への聞き取りでは「たくさんの仲間がまだ眠っている。日本へ還らせてほしい」と切願されました。そのような思いを受け、私たちは「1柱でも多くのご遺骨の帰国を、1日でも早く実現したい」と活動を続けています。

手と手を合わせて拝むことで仏様になれます

これらの活動を通して、私はより広い多くの視点を持つことができるようになりました。そして今、私が願うのは〝人と人が笑顔で、お互いに尊重し合える〟社会です。平和で豊かな日本に暮らしていても、家族や人間関係、将来に悩むことがあるでしょう。そんなときは手と手を合わせて拝みましょう。みんな生きているうちから本来仏様です。お互いに拝み合うことで、仏様になれます。手を合わせること＝信仰こそ、生きる人のためのものなのです。

撮影／光川十洋　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻